

ネルヴァルの「黄金のロバ」について（２）

SUR L'ANE D'OR DE NERVAL（２）

博士後期課程 仏文学専攻57入学

恩 蔵 昇

NOBORU ONZO

ネルヴァル Gérard de Nerval とその友人たちの共作と思われる「黄金のロバ、ペレグリヌスによる諷刺集」*L'ane d'or, recueil satirique par Pérégrinus*（1842年刊）については、すでに昨年度の紀要¹⁾で若干の考察を行なったのであるが、もう少しこの作品にかかづらわってみたいと思う。

さて、今回はジャン・リシェ Jean Richer²⁾ とジェラルド・シェフェール Gérald Schaeffer³⁾ の議論をもとにして考察したのであるが、その要点を述べておいた方が都合がよいと思うので、以下簡単に説明しておく。

「黄金のロバ」は今世紀半ばまで、ほとんど注目されることのない作品であったが、クラルシー Jules Claretie の証言——ネルヴァルがボレル Pétrus Borel らと「黄金のロバ」という本を書いたらしいという話——をもとに、ジャン・リシェらが国立図書館を中心に調査を行ない、その結果前記の本が発見され注目されるようになった。リシェはこの本をネルヴァル、そしてその友人のエドモン・テクシエ Edmond Texier、及びアルセヌ・ウーセイ Arsène Houssaye らの共著であると判断し⁴⁾、ネルヴァルの書いた部分は、そのうちの第1章～第5章、及び結語であると考えた。各章の題名は次のとおりである。

第1章 「肉体なき靈魂」《Une âme sans corps.》

第2章 「人道主義的会議」《Séance humanitaire.》

第3章 「ラテン語は何の役に立つか」《A quoi sert le latin.》

第4章 「酋長」《Le cacique.》

第5章 「オペラ座の舞踏会」《Le bal de l'opéra.》

(……………)

結語 《Conclusion.》

この物語の主人公はペレグリヌス・プロテウス Pérégrinus Protée と言い、作者の名と同じである。ペレグリヌスは、古代ギリシアの大儒派の哲学者で、オリュンピアの競技会の時に、衆人監視の中で焼身自殺をとげたが、その際、昇天するはずの魂が別の少年の肉体の中に転生してしまい、以来転生を繰り返してきた。そして、そのペレグリヌスの魂が、十九世紀のフランス貴族ダルマニー伯爵の死体に転生したことから物語が始まる。死体防腐処理人が来るまでの間、遺骸につきそっていたモ

ラングル侯爵は、死体が生き返ったのを見て驚くが、ペレグリヌスの話に耳を傾け、それ以後、案内人として、彼を連れて当時の社会を見て回る。ここまでの第1章で、その後の章は、十九世紀フランス社会の見聞記風のもの、ペレグリヌスの回想などを記している。

リシェは、「黄金のロバ」からこの部分をプレイヤー版の「ネルヴァル著作集」第1巻に収録した⁵⁾。これに対して、シェフェールは、「黄金のロバ」がネルヴァルとテクシエらの共著であることは認めるものの、ネルヴァルのものは、第一章と主人公だけで、残りの大部分はテクシエのものと主張している。それぞれの主張の根拠となるものは、ヴァリエント（異文）である。リシェは、第1章と第3章にヴァリエントがあるとする。その対応を箇条書きにすると次のようになる。

(1) 第1章「肉体なき靈魂」；「サン＝ジェルマン伯爵」*Le Comte de Saint-Germain* の草稿八葉（1953年頃のものとする）。

(2) 第3章「ラテン語は何の役に立つか」；「同窓生の宴」*Les Banquets d'anciens écoliers*（1841）。

一方シェフェールの挙げているヴァリエントはテクシエのものである。以下、その対応を示す。

(3) 第2章「人道主義的会議」；テクシエ、「パリ情景」*Tableau de Paris*（1852）の中の246—254、279—80、268—9 ページ。

(4) 第5章「オペラ座舞踏会」；テクシエ、「パリ情景」中の「カーニバル」*Le Carnaval*、47ページ。

また、リシェは、先にネルヴァルのヴァリエントとして挙げた(2)の第3章、あるいは「同窓生の宴」の、テクシエによるヴァリエントを指摘し、これをテクシエによる剽窃としている。

(5) 第3章及び「同窓生の宴」；テクシエ『ケン玉の思い出』*Mémoires de Bilboquet*（1853、3 vol.）

そこで、本論では、リシェが挙げているネルヴァルによるヴァリエントと、「黄金のロバ」との関係について、以下考察をしたいと思う。

まず(1)の「サン＝ジェルマン伯爵」であるが、これは晩年のネルヴァル作品を解く重要な鍵の一つとも目されており、筑摩版の「ネルヴァル全集」にも収録されている⁶⁾。また、入沢康夫氏の「ネルヴァル覚書」⁷⁾には、「黄金のロバ」第一章と、「サン＝ジェルマン伯爵」について詳しく論じられているので、そちらも参照していただきたい。

さて、「サン＝ジェルマン伯爵」についてざっと述べることにする。

死の三日前、愛書家ジャコブ（ポール・ラクロワ Paul Lacroix）の要請にもとづき、ネルヴァル自身によって書かれた「全集計画」*Projet d'Œuvres Complètes* の「着手、又は未刊の著作」の項に、「アルテミス、あるいは夢と人生」*Artémis ou le Rêve et la Vie* などの作品名とならんで、「サン＝ジェルマン伯爵回想録」*Mém. du Comte de Saint-Germain* の名が見られる。「夢と人生」の方は、「オーレリア」*Aurélia*（1855）という名で（その第一部のみではあるが）生前発表されたのだが、「サン＝ジェルマン」の方は刊行されることなく、草稿八葉が残されているにすぎない。しか

し、刊行寸前のところまで来ていたらしい。

八葉の草稿は、シャンプイオン＝ルベ・コレクション *Champion-Loubet* のもので、1952年リシエによって『メルキュール』⁸⁾ 誌に発表された。この八葉の草稿には、三つの章立てがしてあり、自筆草稿番号1の付された紙葉に第一章の冒頭部が書かれている。次の自筆番号は12から16と記され、第二章が含まれている。この五枚の草稿は初め7から11の番号⁹⁾ が付され、それが、12から16と訂正されている。次に前の六枚（自筆番号1、12～16）とは質の違う紙が二葉あり、新たに1、2と記されて、第三章の前半が描かれている。分かりにくいので、これも表にしておく。

(1) 自筆番号 (f°) 1 ; 内容、第一章「肉体なき靈魂」*Une âme sans corps* 前半。

(2) f° 7、8、9、10 (11)→f° 12、13、14、15、16 ; 第二章「死体防腐処理人」*L'Embaumeur*

(3) f° 1、2——(1)、(2)とは質の違う紙 ; 第三章「謎とき」*Éclaircissements* 前半。

この草稿がいつごろ書かれたものか、という疑問点については、リシエは1853年のものと考えている。ネルヴァルが、「サン＝ジェルマン伯爵」という作品に言及している書簡は二通ある。一つは、1853年11月30日消印のアベル Abel 宛書簡である。アベルという人は印刷所の現場監督であり、その手紙の中で、ジェラルムは「昨日私が発送したものには、ちょっとした間違いがあった。『サン＝ジェルマン伯爵』は、私の手元に置いておかなければならなかったのだ。もしまだ組版していなければの話だが。もし組版されていないのだったら私にそう言ってくれたまえ」¹⁰⁾ と言っている。この印刷所では、1854年1月に刊行された『火の娘たち』*Les Filles du Feu* を、その時点（1853年11月）で印刷中であつた。従つて、「サン＝ジェルマン伯爵」を誤つて、『火の娘たち』の原稿と一緒に送ってしまったらしいことがうかがわれる。この手紙の最後のところには、「どうか、同封の手紙をジロー氏に渡していただきたい」¹¹⁾ と書いてあり、その同封の手紙と思われるのが、次のダニエル・ジロー Daniel Girard 宛書簡である。「間違つて印刷所に送ってしまった原稿が、一部あるのです。それは『パリ評論』誌に送られるべきもののなのです。（中略）『サン＝ジェルマン伯爵』という作品です。その代わりに、『パリ』誌から、『ラ・パンドラ』が送られて来ます。それが私たちの本に収められるものです。」¹²⁾ 『火の娘たち』は、ダニエル・ジロー書店から刊行された。従つて、「サン＝ジェルマン伯爵」は『パリ評論』誌に、「ラ・パンドラ」は『火の娘たち』に、それぞれ収録されるはずであつたことになる。しかもそれぞれ出版社側に原稿が渡っていることから（校正刷で若干の手直しをすゝるとしても）作品は完成していたと思われる。しかし、周知のように「サン＝ジェルマン伯爵」は発表されるどころか、原稿も八葉の草稿を除いて現存して（あるいは発見されて）いない。「ラ・パンドラ」の方も、『火の娘たち』には収録されず、その前半がデュマ Alexandre Dumas (père) の主宰する『銃士』紙 *Mousquetaire* (1854年6月14日) に発表されただけで、その後半は1840年代にヴァリアントが発表されているものの、生前は未発表であつた。

さて、このような経緯をもつ「サン＝ジェルマン伯爵」と「黄金のロバ」第一章「肉体なき靈魂」との関係であるが、この両者がヴァリアントの関係にあることは一目瞭然である。「サン＝ジェルマン伯爵」の第一章も「肉体なき靈魂」という章題を持っており、その内容もほぼ同じなのであるが、

奇妙なことに（あるいは当然というべきかも知れないが）両者の間に重なり合うテキストがほとんどないのである。つまり、「黄金のロバ」とテクシエの「パリ情景」とのヴァリエントは、全く同じ文さえ含んでいるのに対して、「黄金のロバ」と「サン＝ジェルマン伯爵」は、同じような内容ながら、同様の場面を語る部分がない。勿論、草稿の方に f° 1 と f° 12 の間に入るべき紙葉（多分 f° 2～f° 11 と記された紙葉）が、紛失して、残っていないだけのことかも知れない。しかし入沢氏は「ネルヴァル覚書」で興味深い仮説を立てておられる。氏は「ささやかな思いつき」¹³⁾ と断った上で、「サン＝ジェルマン」の草稿の第一章と第二章の間に、「ロバ」の第一章をはじめこんで読んでみると、うまく内容がつながる、と指摘している。そして、「サン＝ジェルマン」を書くにあたって、旧稿である「ロバ」を再利用したのではないかと推測する。なるほど、そのように読んでみると確かにうまくつながるのである。ネルヴァルにあっては、旧作を手直しして、新作に利用するということはよく見られることである。それは単なる「焼直し」などにとどまらず、「文学のコラージュ」とでも言いたくなるような、作者及び作品の生成・発展に関わる、より積極的なものとして考えられるべきものである。

では、「黄金のロバ」第一章「肉体なき靈魂」がどのようにして「サン＝ジェルマン伯爵」へと変化していったのだろうか。「サン＝ジェルマン伯爵」には次のようなくだりがある。

「老人よ（註＝モラングル侯爵を指す）、私がヨーロッパを去る時に名乗っていた名前を、あなたに告げてはいなかっただろうか……。」¹⁴⁾

これまでの部分で、主人公が侯爵に対して、自分はペレグリヌスであり、ボンヌヴァル伯爵であり、中国にもいたことがある、と語ったらしいことは、第二章の文から推察できる。

「ダル……いや失礼、ペレグリヌス殿、ボンヌヴァル伯爵殿、中国の方よ……。」¹⁵⁾

「サン＝ジェルマン伯爵」では、これに関する言及はないが、「黄金のロバ」には、これに関する話があった。つまりペレグリヌスは、ボンヌヴァル伯爵の肉体に転生したこともあり、また、ダルマニーの肉体に転生する六時間前には、中国で阿片の吸いすぎのために死んだのである。また、自分は長い間ヨーロッパを見ていないのだとも語り、しばらく前にはヨーロッパにいたということを示唆している。そこでヨーロッパを去る時の名前は何だったかという、先に引用した「サン＝ジェルマン伯爵」のくだりがあるわけだが、草稿はここで終わっており、その名前は示されていない。しかし、この後に、十八世紀の最も有名な秘法家であり、転生を重ねて多数の前生の記憶をなくさずにいるという、サン＝ジェルマン伯爵の名が告げられるのは明らかであろう。草稿の文章の中には一度もサン＝ジェルマンの名前は出て来ないものであるから。1842年の「肉体なき靈魂」は、主にペレグリヌスという人物によって特徴づけられるのだが、1853年に言及されている草稿では、ペレグリヌスはすなわちサン＝ジェルマンであって、題名もその名を冠している。つまりサン＝ジェルマン伯爵に対する強い関心が、つけ加えられているのである。これとの関連で、さらにつけ加えられているもの、それが「ボローニャの碑文」である。

「ボローニャの碑文」はイタリアのボローニャにあったと言われる墓石に刻まれた、謎の墓碑銘で

あり、古くから様々な人によって、その解釈の試みがなされてきた。主に神秘主義に興味を抱く人々によって、これについての数多くの本が書かれたが、ネルヴァルは、F.-M. ミソン Misson の「新イタリア紀行」*Nouveau voyage d'Italie* (1731 年版)¹⁶⁾ を読んだらしい。この文章は、ヘルマン・ヘッセ Hermann Hesse やユング C. G. Jung も言及するアブラクサス Abraxas¹⁷⁾ を思わせるが、以下その一部を引用する。

《死霊の神々へ——アエリア・ラエリア・クリスピス、それは男でもなく、女でもなく、^{エルマフロディスト}両性具有者でもない。娘でもなく、若くもなく、老いてもおらず、純潔でもなく、娼婦でもなく、つましくもなく、それらすべてである。(中略)

ルキウス・アガトン・プリスキウス、それはその夫でもなく、恋人でもなく、親類でもない。悲しみもせず、喜びもせず、涙も流さない。(中略) これは、言わば^{なきがら}亡骸なき墓にして、墓なき亡骸である。この亡骸は、亡骸であり墓でありそのすべてである。》¹⁸⁾

この碑文に関連するものとしては、次のようなものがある¹⁹⁾。

(1) 1853年11月23日消印、ジョルジュ・サンド George Sand 宛書簡。この中にルキウス・プリスクスという名が見られる。

(2) 「パンドラ」*Pandora*。その前半が1854年10月31日号『銃士』紙に掲載されるが、前述のように、1853年11月ごろには一応完成していたと思われる。「碑文」の一部が引用されている。

(3) 通称ロンパール草稿(「廃嫡者」*El Desdichado*、及び「時間の踊り」*Ballet des heures*の草稿)。ギョーム Jean Guillaume によれば1853年末—1854年初めのものとされる。「D. M.-ルキウス・アガート・プリスクス。/夫でもなく」とある。

これら三つのものは、どれも1853年末頃(ロンパール草稿は確定しているわけではないが)に書かれたものであり、「サン＝ジェルマン伯爵」も同じ時期のものと推定される。従って、このころネルヴァルの関心が「ボローニャの碑文」に向いていたことが察せられる。「サン＝ジェルマン伯爵」は「黄金のロバ」(1842)とほぼ10年のへだたりをもっているが、この変化は、物語「魔法の手」*La Main enchantée* (1832)とオペラ・コミック「栄光の手」*La Main de gloire* (1850)との関係と同様、時代が下るにつれて、オカルト的傾向が強まって来ている、とリシェは言う²⁰⁾。たしかに、その傾向は認められるが、輪廻転生のテーマは変わっておらず、サン＝ジェルマンという人物を持ってくることで、物語をよりふくらませようという意図が感じられる。もっとも作品のうち草稿八葉しか伝わっていないので、どういう発展があったのかは、推測する以外にない。しかし、サン＝ジェルマンを取り入れることで、18世紀のフランスにも物語を広げることができただろう。そうなれば、話はかなりふくらむはずである。

ついでに言えば、「黄金のロバ」の中にも「ボローニャの碑文」と似たような文句があった。それはこう言うものである。

「私は死んでもおらず、生きてもおらず、亡霊でもなく、生身でもなく、選ばれても呪われてもいない、歴史上の存在でもなければ、伝説上のものでもない。」²¹⁾

1842年のネルヴェルが、「碑文」に関心を抱いていたかどうかは分からない。しかし、すでに同様の傾向はあらわれており、これが晩年においてさらに強まって、「サン＝ジェルマン」のみならず、「パンドラ」や、詩篇にも関係する「ボローニャの碑文」の言葉と結びついたものと思われる。

さて、一応「黄金のロバ」と「サン＝ジェルマン伯爵」との比較は終わりにして、次にリシェのあげているもう一つのヴァリエント、第3章「ラテン語は何の役に立つか」と「同窓生の宴」との関係を見てゆきたいと思う。

「サン＝ジェルマン伯爵」との関係では、「黄金のロバ」は十年ほど前の旧形であったが、今度は逆に、「黄金のロバ」の方が、一年あとのものである。以下、やや長いが、「同窓生の宴」を引用したいと思う。

同 窓 生 の 宴

フリーメースンの宴会やカヴォ（訳註、シャンソン歌手を囲む宴会）の晩餐が流行遅れとなつてこのかた、国民衛兵諸君の安上がりな無礼講ぐらいしか開かれなくなつてしまったレストランの主人たちは、人々の幼年時代の思い出や高等中学出身者の虚栄心を利用することを思いついた。それはレストランの主人たちに、大変よい結果をもたらしたのである。

たとえば、諸君はある新聞で次のような広告を読む。

「カスカメシュ寄宿学校の同窓生諸君。ご承知のように我等同窓生におきましては、尊敬すべき同校長の祝宴の日に、毎年集う習わしであります。

従いまして、カスカメシュ寄宿学校の同窓生の一員、有名なるレストラン主人タルタンピオンの店に於いて、会食が催されます旨ご案内申し上げますとともに、一人あたり10フランの予約金をお願い致します。なお、政治や文学の名士多数が集いますこの親密なる宴会には、一般の方のご入場はご遠慮願います。」

ひっそりとしたタルタンピオンのレストランは、当日、陽気な同窓生たちで一杯だった。シャツ一枚で腕にナプキンをかけたタルタンピオンは、喜びで一杯になって諸君を抱擁する。この腹のつき出た、赤い頬髯をはやした男を前にして、諸君はたじろぐ。「おや、君はちびのタルタンピオンを見忘れたのかい。ほら、君は僕のことをルージェと呼んだじゃないか。

——ああ、そうだ、ちびのルージェだ……

——ぼくらは仲よしだったなあ。だからもう一度抱擁してくれたまえ。全体、君は一度もここへ来なかったね。

——いや、その……あのう……。

——いいさ、今はこの入口を知っているんだから。《智者ニハ一言ニシテ足レリ》だよ。仲間たちは上にいるよ。」

諸君は友人の手に10フランを握らせる。やがて諸君は、髯をはやし、腹の出た、前髪をたらした一

群の紳士たちの腕に抱擁される。尊敬すべきカスカメッシュ氏は諸君に好意のこもった抱擁をし、諸君のチョッキを涙で濡らす。彼はかつてこうした日に、諸君が持って行ってあげた砂糖の塊や植木鉢や食器を思い出しているのだ。諸君はといえば、諸君の青春を一杯に満たしていた隠元豆や、水割り葡萄酒、葡萄ジャムを塗ったパン切れのことを考えているのである。ああ、そうしたことが喜ばしいのだ。

黒い服を着たタルタンピオンがやって来る。「友人諸君。人数が足りないんだ。なにしろ、コック長は六十人分の料理を見込んでいたんだから。だが、友情がこの穴を埋めてくれると思う。ほんの五リーブルの割増金でいいんだ。

——デザートが出る頃には、人数は倍になってるさ、とボードビル作者が言う。

——そうだろうとも。葡萄酒代は別払いだよ、とレストラン主人は言葉をついだ。なにしろ音上げることなど知らぬ強者^{つわもの}ぞろいだからな。」

スープが出た。沈黙が支配している。「先生！リヴァールったらいいじゃないですよ！と突然戯^{おど}け者が叫んだ。僕のスープをストローでみんな飲んじゃうんですよ！

——リヴァール君、テーブルを離れなさい！と人の良い教師は、この愉快な思い出に合わせて言った。

——先生！ちびのヴィネはね……と別の者が叫んだ。いつだって先生のパンのバターを舐めているんですよ！

——ヴィネ！ヴィネ！と昔の自習監督教師の一人が雷のような大声で言った。ちょっと待ってなさい。お前にはいいものを舐めさせてやろう……。」

人々は拍手をする。陽気さが広がってゆく。たえず率直な好意が支配し、次から次へとあれは誰だ、これは誰だとやり始め、お互いに教え合うのだった。

「あれは、あの頬髯をはやした背の高い男は、フィロジョンかな？」

——そうだよ、優等賞を受けたやつだよ。今はウール街で靴屋をやっているんだ。

——それから、レトゥルノーは、作文がとっても得意だったっけ。

——あの金髪の太っちょがそうだよ。今は鉛筆と金ペン工場の所有者なんだ。そのうち彼の従兄のように上院議員になるよ。

——あそこにいる男は知っているような気がするのだが……。あの着飾った小男は誰だい？

——もっとも卓越せるわれらがボードビル作者の一人さ。彼はサン＝タルバンというペンネームで知られているけれど、あれはプリュヴィネだよ。その向こうがコワニャールの二兄弟、ボードビルのジャム双生児だよ、そしてローランサン、シャピュイ・ド・モンラヴィル、パチュロー、アルナル、シャテル神父だ、等々」

諸君は、昔の同窓生の中にかくも多くの名士を見出して満足する。そしてもはや会費を惜しがったりはしなくなる。突然、会食者の一人がコップを手にしち上がる。

「われらの敬愛する寄宿学校の先生、尊敬すべきカスカメッシュに乾杯！先生の父親のような心づ

かいの数々は、われわれの心から決して消えさることはないでしょう。」

教師はコップを涙で濡らし、答える言葉も途切れがちだった。

今度はレストランの主人のタルタンピオンが立ち上がって、叫んだ。

「カスカメッシュ出身者の永遠なる団結に乾杯！同校の卒業生諸君は、各々の選んだ様々な職業において、国の名誉となっております。後輩諸君は、誉れある諸先輩の例に倣っていただきたいものです。この佳き日がわれわれと彼らのために、とこしえに繰り返されんことを！」

食事は、こうした心地よい意志表明のうちに終わった。デザートになると、代議士や要職にある人々はそっと姿を消し、レストラン主人は妻と子供たちを部屋に上がらせた。ボードビル作者たちは、ほろ酔い加減の折返し句を歌い始めた。こうした折のために作曲した歌を、各人がちゃんと持っていたのである。

一般に、ボードビル作者というものは、こうした集まりの座をにぎわせてくれるものだ。それは彼等にとっても、自分の修練の結果を人前で確めることになるのである。

このスコラ的な折返し句の合い間に、レストラン主人は発言を求めた。

「わが友人、同胞諸君！」と彼は感動をこめた声で言った。「わが古き同窓生の一人、若きバルバンシュは今も昔と変わらずまことに前途有望であります。彼は大学で古典優等賞を獲得し、今日われわれすべての関心に値する位置を占めております。彼は学界に身を投じ、おそらくは学界の誉れ高き者ともなりえたのですが、それもこの実利的な時代においては十分なものとは参りません。私のもとにやって来たとき、この大変な勉強家は、かなり以前から逆境に沈んでおりました。で、私は心に言ったのです、かつての校友、カスカメッシュ寄宿学校の輝かしい生徒を見捨てておくことなど出来はしないと（拍手）。彼はまもなく諸君の前に現われるでしょう。さっきコック見習いの^{つま}儉しい服を脱ぎに行きました。彼は身づくろいを正して、仲間たちを抱擁しにやって来るでしょう（歓声）。友人諸君！お分かりのことと思いますが、少しの募金、すなわち友情の善意による自発的な献金が、彼を劣悪なる境遇から脱け出させることでしょう。私にはよく分かっているのですが、この境遇のために彼は創作をしていないのです。もっとも、彼のラテン詩に対する議論の余地なき才能を役立てることは、募金によってかなうことでしょう。

皿が一同に回され、それに小銭がのせられてゆき、やがて幸福なバルバンシュが現われて、皆の歓喜と好意に迎えられ、デザートの残りの時間をともに過したのであった。

歌と朗読が終わると、各人は千鳥足をまねて引き上げ、諸君の仲間のレストラン主人が諸君を抱擁し、以後諸君をこの店の常連に加えたい、と言う。

翌日すべての新聞が、この学校に敬意を表し、楽しい祝宴の話と、韻文詩やシャンソンを掲載する。さらにタルタンピオンの住所と、いつでも結婚式、祝宴、団体での食事に応ずる旨、載せているのである²²⁾。

以上が 1841 年『十九世紀の風俗百科・プリズム』*Le Prisme/Encyclopédie morale du dix-*

neuvième siècle (パリ、キュルメール書店)に発表された「同窓生の宴」である。作者名はアロイジウス Aloysius になっているが、目次のところにジェラルド・ド・ネルヴァルの名がある由(スメリエ Senelier による。)²³⁾

さて、まず「黄金のロバ」第三章「ラテン語は何の役に立つか」との比較から始めよう。

文の内容はほとんど同じであり、全く同じ文章も数多くある。ただし、「黄金のロバ」のペレグリヌスと案内役のモラングル侯爵がこの宴会に出席することになるため、それとの関係で若干加筆されている、という印象である。第三章の冒頭部は次のようになっている。

「ペレグリヌスがいくつかの新聞にざっと目を通して見ると、次のような新聞広告に出くわしたので、よく説明してほしい、と侯爵に頼んだ。」²⁴⁾

この後に「同窓生の宴」にあるのと同様の新聞広告があり、それにつづいて、

「こんな盛大な式に行かないという手はないよ」と侯爵はペレグリヌスに言った。「さいわい、僕達は二人ともこの有名な学院に籍を置いていたのだ。(後略)」²⁵⁾

という一節があって、二人は昔の同窓生の宴会に出かけてゆくのである。その後、「同窓生の宴」とほぼ同じ展開があり、同窓生同士の誰何の後、ペレグリヌスの感想が示される。

「昔の同窓生の中に、多くの名士を見出し満足したペレグリヌスは、順番に彼等の肩書きを説明して貰い、ラテン語の勉強が、ボードビルやメリヤス業界、演劇、なめし皮商あるいは油取引の分野で、数多くの権威者を生みだしたことに、ただただ驚いていた……。 (後略)」²⁶⁾

そして文末の新聞記事のあとに、こういう文章がつけ加わる。

「多分、君は尋ねるだろうね」と侯爵はペレグリヌスに言った。「レストランのおやじにラテン語が何の役に立つのかってね。」²⁷⁾

このように加筆された部分は、ペレグリヌスに関係するものだけである。1841年のものは同時代人による時代諷刺であったのだが、1841年のものは、時代の異邦人たるペレグリヌスの視点を入れて諷刺している。つまり前者の諷刺の対象が、レストラン主人の方にあるのに対し、後者はその視点も残しつつ、ラテン語教育というものに対象が移っていると言える。とはいえ、この間には、時間的(1841年—1842年)にも、内容的にも大きなへだたりは感じられない。旧作の積極的再利用とまでは言いかねる。

「黄金のロバ」第三章の内容を会食のテーマと名づけるならば、そのようなテーマを扱ったものとして、やはり晩年の作品「十月の夜」*Les Nuits d'Octobre* (1852)の第四章《無礼講》*La Goguette*、及び「散策と回想」*Promenades et Souvenirs* (1854—1855)の第三章《歌の集い》*Une société chantante* が挙げられるだろう。

前者の《無礼講》という言葉は、「同窓生の宴」でも使われている。また、後者の《歌の集い》は「建築関係」の集い、すなわちフリーメーソンの集会であって、「フリーメーソンの宴会」という言葉もやはり、「同窓生の宴」の冒頭に出て来ていた。晩年の二つの作品に共通するものは、(1)ポーランド人に乾杯を捧げる話と、もう一つは「シルヴィ」*Sylvie* (1853)などにも触れられていたが、(2)

音楽学校流の歌い方に対する嫌悪、昔風の女性の歌声に対する賞讃である。これは1841—2年のテキストには全く出てこないものであって、この二つも晩年において現われてきた小テーマかも知れない。この二つのグループにも、やはり10年ほどのへだたりはあるが、両者をつなぐ糸が感じられないこともない。ただしこのテーマがネルヴァル独自のものかどうかは何とも言えない。

さて、「黄金のロバ」第三章が、「同窓生の宴」を下敷きにしていることは、ほぼ明らかだろうと思う。従って、後者がネルヴァルのものであるならば、前者がネルヴァルのものであることは断定できると思うのだが、ここでもう一つ問題になるのは、後者がほんとうにネルヴァルのものであるかどうかである。

1841年の『プリズム』誌（これはあるいは単行本であろうか）に掲載されたテキストには、先に述べたようにアロイジウスという署名があって、ネルヴァルの名は目次に載っているという。ネルヴァルという名を使っているのなら、何故本文にその名を署名していないのだろうか。以下に若干の考察を述べさせていただくことにする。

アロイジウスが、ネルヴァルのペンネームの一つであったことを語っているのは、親友のゴーチエ Théophile Gautier である。彼は「ロマンチズムの歴史」でこう語っている。

その時分、彼はジェラルド・ド・ネルヴァルとは名乗らず、ラブリュニー Labrunie と呼ばれてゐた。（中略）スタンダールのやうに、彼も様々な匿名を使つて自分を隠すことを好んでゐた。彼は假面を見抜かれると、それをかなぐり棄てて、別な假面、別な覆面をしたものであつた。彼は次から次へとフリッツ Fritz だとか、アロワジウス Aloysius（引用者註、ラテン語風に読むとアロイジウス）だとか、そのほか色々な名前で署名してゐた。従つて、今日ジャーナリズムの埃っぽい墓穴中に埋もれた彼の作品を識別するのは、現在にはむづかしいであろう。（中略）多分彼は、実際に名聲に値する人物とならぬ限りは、また自己の理想に近附いてそれと顔を合はせても赤くならないですむやうにならない限りは、人に己が名を知られて／指でさし示されて而してあの人よと言はるること／*Digitō monstrari et diceri: hic est.*／を望まなかつたであらう²⁸⁾。（渡辺一夫氏訳）

この文章はゴーチエ晩年（1872年没）のもので、当時すでに、ネルヴァルの作品を識別することの難しさを語っており、「黄金のロバ」の問題もまさにそのことに関わっているので、筆者には興味深い。ついでながら、この文の他のところでは、アスリノー Charles Asselineau が、劇作「阿呆の王」*Le Prince des sots* の原稿を探しまわっているのだが、一向に見つからない、という話が語られている。この作品は小説形でのみ伝わり、劇作のほうは残っていない。

さて、話を元に戻そう。この文の中にアロイジウスという名が出てきた。またラブリュニーという名もあったが、こちらの方はネルヴァルの本名である。ジェラルドは、作品に Gérard L..... と署名したことはあるが、Gérard Labrunie と本名を記すことは避けていたようである。おそらく父親の反対によるものであろう。そこで、様々な署名、ペンネームや名前のみ（Gérard）、あるいは頭文字な

どによる署名をしているが、最終的に Gérard de Nerval を名乗るようになった。周知のように、その名は母方の土地にある「ネルヴァル圃地」から取られている。また母方の苗字 Laurent と父方の Labrunie 一種のアナグラムにもなっている。(Lavret→t を取って逆に綴ると nerval。ラテン語ではUをVと書くことが多い。Labrunie→b と i をのぞく。) では、ジェラルールが、ネルヴァルという筆名を用い始めたのはいつごろのことだろうか。

スヌリエによれば²⁹⁾、1831年、贈答用装飾本『令女頌』*Hommage aux Dames* からだという。この本には詩「蝶」*Les Papillons* が収録されており、それにネルヴァルと署名してある由。ちなみに「蝶」の初出は、1830年『十九世紀メルキュール・ド・フランス』誌 *Mercure de France aux XIX^e Siècle* で、署名はジェラルール Gérard である³⁰⁾。では、1831年以後はすべてにネルヴァルと署名するようになったかというそうではない。無署名のものもあるし、頭文字 G., G. L., G. de L., G-D., G. G.,³¹⁾ などというものもあり、ジェラルールも多く使われている。たとえば、「悪魔の肖像」*Portrait du Diable* (1839年5月28日『プレス』誌 *La Presse*; Sb n° 725) には G. L. と署名してある。また、1838年—40年頃の『プレス』誌や「メサジェ」誌 *Messenger* には、G., G. de L., G-D. などが使われ、無署名の場合もある。G-D. というのは、おそらく Gérard の省略形、Gérard の最初と最後の文字 G と d を示したものである。また1837年頃の『プレス』誌には、G. G. というものが多いが、これは多分ジェラルール＝ゴーチェ Gérard-Gautier の略であろう。つまり G. G. は共作を示すということになる。

先に引用したゴーチェの文章では、名声に価する人物になるまでは、人に自分の名を知られたくなかったのだらうという推測があった。逆に言うと、良い出来ばえの作品には、自分の名(この場合 Gérard de Nerval)を冠してもよいという理屈になるだろう。もっとも、この場合でも Nerval を自分の最終的な名にしようと思ったのが、いつからのことかはっきりしないので、若い頃の作品に Nerval と署名があるからと言って、ただちに Nerval 自身がその作品の出来に満足したかどうかは分からないが。試みに、「ファンテジー」*Fantaisie* を調べてみよう。

「ファンテジー」の初出は1832年、署名はジェラルール。1835年の時点でもジェラルール。1842年『シルフィード』誌 *La Sylphide* では題名を「幻想」*Vision* としているが、ジェラルール・ド・ネルヴァルと署名し、後は変わらないようである³²⁾。

では、「同窓生の宴」の発表された1841年の時点ではどうか。この年発表されたものには次のようなものがある。

- (1) 「リエージュの一日」*Une journée à Liège* (『プレス』誌1—2月、署名フリッツ)
- (2) 「ブリュッセルの冬」*L'hiver à Bruxelles* (同誌2月、署名フリッツ)
- (3) 「同窓生の宴」既出。(署名アロイジウス)
- (4) 「一パリ市民の回想、1832年のサント＝ペラジー監獄」*Mémoires d'un Parisien—Sainte-Pélagie en 1832*, (『アルチスト』誌 *L'Artiste* 4月、署名ジェラルール・ド・ネルヴァル)

ネルヴァルと署名したのは4番目のものだけである。ということは、この頃まだネルヴァルという

名をあまり使っていなかったのだろうか。おそらく、そうではあるまい。今まで触れなかったが、1841年という年は重要な年である。つまりネルヴァルの最初の精神錯乱の年であり、ジュール・ジャン Jules Janin が『デバ』紙 *Journal des Debats* に、ネルヴァルの精神の墓碑銘ともいえるべき「ジェラルム・ド・ネルヴァル」という記事を發表している年である。また、書簡に付す署名では、1831年に G. ラ・ブリュニー・ド・ネルヴァルという名が見られ、1838年頃からは、ネルヴァルと署名することが多くなってきている。従って、この頃には、ネルヴァルという名前は（世間一般からすれば大したことはないが）、一部ではわりに知られていたのではないと思われる。

次にアロイジウスという名前を見てみよう。ジェラルムがアロイジウスという名で發表したものとして、スヌリエは次の二つを挙げている³³⁾。

(1) 「グランジュの領主ラウル・スピファームの奇妙な伝記」 *Biographie singulière de Raoul Spifame, seigneur des Granges* (1839年『プレス』誌)

(2) 本稿で問題にしている「同窓生の宴」(1841年)

(1)の作品は、1845年に「フランス最良の王」*Le Meilleur Roi de France* と題して、^{ルグー・ピトレスク}『*Revue Pittoresque*』に、ネルヴァルの署名入りで發表され、のち「ビセートルの王様」*Le Roi de Bicêtre* という題で、1852年刊の『幻視者たち』*Les Illuminés* に収められた。ネルヴァルの友人であるオーギュスト・マケ Auguste Maquet は、この作品は自分がネルヴァルのために書いたものだとしているが、少なくとも発案はネルヴァルのものだ、とリシエは言う³⁴⁾。

この作品はネルヴァルにとって重要なテーマである分身のテーマを扱ったものであり、すでに述べたように1845年にはネルヴァルの署名入りで發表されている。しかも1852年には作品集に入れているのであるから、ネルヴァルには自分の作品であるという意識があったように思われる。おそらくは、デュマの主要作品に匿名で協力執筆したと言われるマケが、今度はネルヴァルの作品にかなり協力した、ということではないのか。共作ということでは、1839年5月の《脚本仲買人》宛の手紙が思い出される。

「共作者デュマについて不平を言う気は毛頭ないのですが、『鍊金術師』の手形は全然もらっていないのですから、『レオ・ビュルカル』の手形は全部私に残してくれてよかったのではないかと思います。こういったことは大変デリケートな問題（中略）です。とくに共著の場合は双方ともそれぞれ自分の持ち分より多く仕事をしたと思うのが常ですから。」（井村実名子氏訳）³⁵⁾

今度のマケとネルヴァルの場合も同様だったように思われる。

さて、紙数も尽きてきたので、「同窓生の宴」について述べよう。この作品も、ネルヴァルのものらしく思われるが、テクシエも後年（1853年）に、この文章を自分の作品に取り入れている。それはこの文章が自分（テクシエ）のものだという間接的表明ともとれないことはない。一方ネルヴァルのものと思われる根拠は、アロイジウスという署名、及び目次に見られるネルヴァルの名前である。そこでどう考えたらよいか。なんだか1と1をたして2にするようで気が引けるが、結局のところ、「同窓生の宴」もネルヴァルとテクシエの共作というふうに考えられないでもない。それならば、や

はり二人の共作の「黄金のロバ」に取り入れられて不自然ではない。第一、彼らが章ごとに分担したということもはっきり言えないのであって、お互いに相談しながら、あるいは一方が考えたことを他方が文章化した、ということも考えられないことではない。また彼らの間では、先に引いたネルヴァルの手紙のように、金が必要なときには問題になるかも知れないが、そうでないときは、あまり厳密ではなかったような気がする。また、自作と共作の区別は多分はっきりしていただろうと思うのだが、自作の満足できる作品にはネルヴァルと署名し、それ以外、ないし共作の時にはアロイジウスなどの別名を用いた可能性も全くないとは言いきれないだろう。

ネルヴァルの作品世界の周囲には、印刷形のみしか伝わらない、従って筆跡などで判定できない作品がいくつもあって、その辺はきわめて曖昧であるように思う。これを少なくともネルヴァルの関与しているものとして取り入れるか、ネルヴァルだけのものではないとして切り捨てるか、要するにネルヴァル世界の国境線をどこに引くかは、それぞれの研究者の姿勢、ないし方針によって分かれるところであろう。しかし、たとえ判断がつかないものであろうとも、その研究を怠ってよいことにはならない。視野は広く、しかし断定は慎重にすべきことを、自分に言いきかせる次第である。

主要参考文献

入沢康夫「ネルヴァル覚書」、『詩学』昭和56年7月～58年7月。

Nerval; *Œuvres I. texte établi, présenté et annoté par Albert Béguin et Jean Richier*, bibliothèque de la Pléiade, N. R. F., Gallimard. 5^e édition, 1974.

「ネルヴァル全集」全三巻、中村真一郎他訳、筑摩書房、1975—1976年。

Jean Senelier: Gérard de Nerval, essai de Bibliographie, Nizet, Paris, 1959.

〔註〕

- 1) 明治大学大学院紀要第20集—4 (文学篇)、昭和57年度、p. 99—p. 112. 「ネルヴァルの『黄金のロバ』について」参照。
- 2) Cf. Richier; *L'ane d'or par GERARD DE NERVAL*, *Mercure de France*, 1^{er} mai 1955.
- 3) Cf. Schaeffer; *Nerval et Texier, ou de Pérégrinus à Olibrius*, *R. H. L. F.* sep.-oct., 1968.
- 4) この「黄金のロバ」は、ボレルには関係がないらしい。
- 5) Cf. Nerval; *Œuvres I*, texte établi, présenté et annoté par Albert Béguin et Jean Richier, bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 5^e édition, 1974, (以下 PL, I と略)
- 6) 「ネルヴァル全集」第三巻、筑摩書房、1976年。pp. 255—272 (稻生永訳註)。
- 7) 入沢康夫「ネルヴァル覚書」、『詩学』に連載、昭和56年7月～58年7月。特に57年1月～3月号参照。
- 8) Cf. Richier; *Nerval dans la nuit du tombeau*, dans *Mercure de France*, 1^{er} nov. 1952.
- 9) PL. I のリシェの註 (p. 1371) では、5枚の紙に初め7、8、9、10と番号が付き、次に12、13、14、15と訂正され、そして16と番号が付されたと読める。
- 10) PL. I. p. 113, Il y a eu une légère erreur dans mon envoi d'hier. Il faudrait me garder «le Comte de Saint-Germain», s'il n'est pas encore composé. Sinon, faites-le moi dire.
- 11) Ibid. Soyez assez bon pour transmettre la lettre ci-jointe à M. Giraud.
- 12) Ibid. p. 1114. Il y a une portion de copie que, par erreur, j'ai envoyée à l'imprimerie. Elle est destinée à la *Revue de Paris*; (.....) C'est la *Comte de Saint-Germain*. En revanche, on vous enverra, du journal *Paris*, la *Pandora* qui prendra place dans notre volume.

- 13) 前掲書、『詩学』昭和57年2月号、p. 69 参照。
- 14) PL. I. p. 558 《Ne vous ai-je pas dit, vieillard, (.....) le nom que je portais quand j'ai quitté l'Europe.....》
- 15) Ibid. p. 554. 《Monsieur le.....pardon, monsieur Pérégrinus, monsieur le Comte de Bonneval, monsieur le chinois.....(.....)》ここでの Monsieur le..... は明らかに、Monsieur le comte d'Almany と呼びかけようとして、その誤りに気づいたもの。従って訳では「ダル..... (マニー伯爵よ)」とした。
- 16) Cf. PL. I. p. 1373.
- 17) Cf. ヘッセ「デミアン」、ユング「自伝」中の「死者との七つの語らい」。
- 18) PL. I. p. 557. 《Aux Dieux Mânes : Aelia Laelia Crispis *qui n'est* ni homme ni femme ni hermaprodite : ni fille, ni jeune, ni vieille, ni chaste, ni prostituée, ni pudique, mais tout cela ensemble, (.....)》Lucius Agathon Priscus, *qui n'est* ni son mari, ni amant, ni son parent, ni triste, ni joyeux, ni pleurant : (.....) C'est-à-dire un tombeau qui ne renferme pas de cadavre, un cadavre qui n'est point renfermé dans un tombeau ; mais un cadavre qui est tout ensemble à soi-même et cadavre et tombeau.》
- 19) Cf. 入沢康夫、前掲書、昭和57年3月号、p. 65—66.
- 20) 註 2) 参照。
- 21) PL. p. 527. Je suis (.....) celui qui n'est ni mort, ni vivant ; ni ombre, ni corps ; ni élu, ni damné ; ni historique, ni fabuleux.
- 22) 引用文が長いので省略する。Cf. PL. I. pp. 1367—1370.
- 23) Cf. Jean Senelier : *Gérard de Nerval, Essai de Bibliographie*, Nizet, 1959. p. 151, Sb. n° 726.
- 24) PL. I. p. 536, En parcourant les journaux, Pérégrinus tomba sur la réclame suivante, qu'il pria le marquis de vouloir bien lui expliquer :
- 25) Ibid. p. 537. 《Nous ne pouvons manquer une telle solennité, dit le marquis à Pérégrinus : nous avons tous deux la bonheur d'avoir appartenu à cette institution célèbre, (.....)》
- 26) Ibid. p. 538. Enchanté de trouver tant de célébrités dans ses anciens condisciple, Pérégrinus, qui se faisait expliquer leurs titres à mesure, s'étonnait seulement que l'étude du latin eût produit tant de sommités dans le vaudeville, la bonneterie, le théâtre, la peausserie ou le commerce des huiles.....
- 27) Ibid. p. 540. 《Vous demandez peut-être, dit le marquis à Pénégrinus, à quoi le latin peut servir pour un restaurateur ?》
- 28) ゴーチエ「青春の回想——ロマンチズムの歴史——渡邊一夫譯、富山房百科文庫2、昭和52年、pp. 91—93
- 29) Senelier ; op. cit. p. 214.
- 30) Ibid. p. 78, Sb n° 81.
- 31) Cf. Ibid. p. 214.
- 32) 田村 毅「ネルヴァルの詩学(VII)」東京大学教養学部外国科編、外国語科研究紀要(フランス文学論文集) 1982、第30巻、第2号、p. 2 参照。
- 33) Senelier ; op. cit. p. 215.
- 34) Nesval ; *Œuvres II*, par Béguin et Richer. bibliothèque de la pléiade, 4° éd. 1978. p. 1516.
- 35) 筑摩版「ネルヴァル全集」第3巻、p. 388—389